



第30回 日本語スピーチ発表会

つなぎ続ける心の絆、平和をつくる

日本在外企業協会（日外協）は、アジア各国で行われた日本語スピーチ・コンテストの優秀者を招聘して、第30回日本語スピーチ発表会を昨年10月29日に東京・中央区の鉄鋼会館で開催した。今回は、ブルネイ、カンボジア、インドネシア、ラオス、マレーシア、ミャンマー、フィリピン、タイの8カ国から選ばれた12人が、各国関係者、学生、会員企業関係者などの前でスピーチを披露した。

冒頭、日外協の畑中専務理事が、「この発表会は今年で30回目を迎える。ここまで支えていただいた関係者、現地での日本語スピーチ・コンテストを開催し優秀者を日本に送り出していただいた日本国大使館の皆様などに深く感謝したい。昨年までの発表者は母国と日本の発展のために活躍していると思う。このような国際交流活動は、日外協の基本的な活動として今後ともしっかりやっていきたい」と挨拶した。今回の発表会には、アジア各国在住の過去の参加者11人からの動画を含むメッセージが届けられ、会場で披露された。

またスピーチ終了後は、桜美林大学経済経営学系の馬越恵美子教授から、「今回で30回目だが、講評の必要が

ないくらい楽しく、最高のレベルになった。これまでの参加者314人に家族、関係者などを加えると何万人という人の心がつながっており、この力が平和を生み出していく。あと30回は続け、ぜひ次の世代につなげて欲しい」とのコメントがあった。

スピーチ発表会後の交流会では、発表者12人と会員企業、各大学の学生、アジアからの過去の参加者などが出席し、歓談する中で交流の輪を広げることができた。

各国の発表者は10月25日に来日し、会員企業（味の素、花王）の工場見学、茶道体験、三味線・琴演奏会、観光など日本を理解するためのプログラムに参加した。

なお、今回から本発表会は国際機関日本アセアンセンターにご後援いただいております。また特定非営利活動法人アイセック・ジャパンには、昨年に引き続き多大なるご支援、ご協力をいただいた。厚くお礼申し上げます。以下スピーチの要旨を紹介する。（発表順に掲載。所属、年齢は発表会当時）

※本事業の詳細は日外協 HP 参照「日外協の活動」>「国際交流活動」
<http://www.joea.or.jp/activity/exchange/speechcontest>
また、同サイトで発表会の模様を動画配信中

*写真は発表会当日、各国優秀者の皆さんと講評の馬越教授ほか日外協、日本アセアンセンター、アイセック・ジャパン各関係者、参加国大使館関係者。

1. リンダ・アリア・ウィダヤンティさん (インドネシア パシムナショナル大学 学生 21歳) 「日本のおもてなしから平和が生まれる」

どの国も平和を期待して、国と国との関係を深めるためにいろいろな活動を行います。今日は日本とインドネシアの関係についてお話ししたいと思います。

お互いに関係を結びメリットを得るためには、両国の文化や習慣を理解する必要があります。日本の友人に「おもてなし」というのは何か知って

る？ と聞かれたことがあります。私が活用していた日本語交流オンラインゲームには交流するための部屋があり、利用者を喜ばせるために様々なアイテムを使って部屋を飾り付けます。そういった配慮がおもてなしの心だと思いました。これを



機に、おもてなしの心について興味を持ちネットで調べると、おもてなしとは相手をおもんばかる気持ちから生まれるもの、相手のことをよく考え上質な気遣いができる人こそが紳士淑女たり得るのだと書いてありました。

この前見た日本のテレビ番組は、インドネシアは日本に注目されている国の1つで、インドネシアの大多数はイスラム教徒なので、多くのムスリム(イスラム教徒)に日本に来てもらうためにはどんな準備をしたらいいのか、というものでした。例えば、礼拝所やハラールフードを用意すればムスリム観光客は安心して訪問でき、留学したいインドネシア人も生活の心配がなく、来日するムスリムはどんどん増えるでしょう。そうなれば両国にとってメリットが生まれます。サービスに加えて相手を思いやる気持ちがおもてなしである、とやっと分かってきました。

日本人がインドネシアで働く際、多少文化が違っていても日常生活にそれほど支障はありませんが、ムスリムが日本の会社で働く場合は、イスラム教に関する文化の違いから日常生活を送ることが大変難しいのです。ムスリムが1日に5回決まった時間にお祈りすることを多くの日本人は知りません。ムスリムに対して「もうお祈りをした?」と言っていただけで、それはまさに「おもてなし」であり、それができる人こそ紳士淑女だと思います。

おもてなしはインドネシアの文化にはないものですが、それを見習うのは良いことだと思います。互いを尊重したり気遣う気持ちを表したりすれば、より良い関係を深めることができるでしょう。ささいなことでもお互いを理解しようとしなければ、安倍晋三首相やスカルノ元大統領がおっしゃった、「共に立ち向かう」「共に生きる」という私たちの大きな夢を叶えられないと思います。

2. チュン・ミン・フィさん

(ブルネイ システムエンジニア 27歳)

「スマホ依存症」

現代の科学技術の発達により、私たちの日常生活は、いろいろな面で変化しました。電話も携帯電話になり、さらに小さくてあらゆる機能を持つ

た「スマートフォン」という携帯に変わりました。「スマートフォン」は「スマホ」とも呼ばれます。また近年スマホの値段が安くなるとともに、スマホを使う人もますます増え続けています。しかしスマホに過度に依存しすぎると、「スマホ依存症」というコミュニケーション障害になる可能性があることを皆さんはご存知でしょうか。



これから4つの項目を読み上げますので、皆さん、いくつ当てはまるか数えてみてください。

1. スマホがないと、とても不安に感じます。2. 分からないことがあると、すぐにスマホに頼って調べます。3. SNSのメッセージが気になって、常にスマホを手放すことができません。そして最後は、あなたにとってスマホは朝一番に探すもので、寝る直前に下に置くものです。

いかがでしたか? 3つ以上当てはまった人たちは、スマホ依存症になる可能性が高いです。スマホ依存症の症状は微妙なので、普通は患者の多くが自分がスマホ依存症であるという自覚がありません。スマホを長時間使い過ぎると肩こりや頭痛になるだけではなく、睡眠不足や視力障害を引き起こす可能性もあります。SNSで簡単に連絡が取れるようになるにつれて、実生活での人との交流はだんだん少なくなっていきます。残念ながら、時々私もスマホ依存症になってしまったと感じます。でもスマホ依存症は少しずつ克服できると思っています。まずはスマホの使用時間を減らすことから始めてみましょう。例えば、重要でないアプリの通知機能をオフにしてみましょう。

スマホは、私たちの生活に必要不可欠なものになりつつあります。そのため私たちはスマホとうまく共存していくことが必要です。皆さんは今のままスマホを使う習慣を続けますか。それともスマホの使い方を見直してみますか。今日この会場を出る前によく考えて、正しい選択をしてください!

3. サンディー・ウェイさん (ミャンマー 東ヤンゴン大学 学生 19歳) 「二番目の家族」

2番目の家族、それはマノーラマという無料教育僧院で私が日本語を勉強しているクラスのことです。クラスの名前は「エリクラス」。私にとってエリクラスはとても大きい存在です。日本語を勉強でき、私の人生を変えたと言っても過言ではありません。

エリクラスと出会ったのは3年前のこと、『NARUTO』という日本のアニメが大好きになり、日本語を勉強したいと思っていました。しかし両親は、「勉強の理由はアニメでしょ。そんなの意味がないよ。将来のためにちゃんと大学の勉強をしろ」と言って授業料を出してくれませんでした。

そんな時、マノーラマ僧院で外国語やコンピュータの勉強を無料で教えていることを知りました。本当に嬉しかったです。そこでエリクラスに出会えました。エリクラスで勉強し始めてから私は自分が変わってきたような気がします。一番変わったことは皆さんの前で発表できるようになったことで、3年前の私は夢にも思いませんでした。

私は子どもの時から人見知りをするたちで、人前に入るよりは自分1人でいるほうが良いとずっと思っていました。学校の教室で手を上げ自分の意見を言える子たちを見ても、まねることは全然できませんでした。もし間違えたら冷やかされるのではと考えると、怖くて何もできませんでした。

しかし今は泣き虫ではなく、てきぱきと行動できる私になりました。先生はどんな時でも頑張れるように、元気を出せるように、いろいろな方法



で教えてくださいました。同級生たちがいつも頑張れと言ってくれることで勇気が湧いてくるようになり、前を向いて進みたいという気持ちが強くなってきました。このスピーチコンテストに出ると決めた時も、皆はいろいろな方法で私を支え

てくれました。皆の応援で自分自身を信じるようになり、それが私をこの舞台の上に乗せてくれました。

嬉しいことがあれば一緒に喜び、悲しいことがあれば慰めてくれるエリクラスには、家族と同じような温かい雰囲気があります。先生方は親、先輩や後輩は兄弟のようで、私の心の中では2番目の家族を見つけたかのように感じられています。これからも、もっと温かい家族になるように自分からできることを頑張っていきたいと思います。

4. エム・ウサーさん (カンボジア 旅行会社勤務 22歳) 「自分の将来は自分で作るものだ」

去年勉強を続けたいけどお金がなくてガードマンの仕事をしている男の子に出会い、とてもかわいそうだと思います。私の会社の社長も彼をかわいそうだと思います、学校に「通わせてあげる」と言いました。でも男の子は学校に行かずに、歌を歌ったり友達に電話をしたりしていました。

実は私も男の子と同じように貧しい家に生まれました。母は、「今は大変だけど、頑張って勉強したら将来は良くなる」とアドバイスをしてくれました。私は母の言う通りにしました。小学校卒業後、村には中学校がないので町の祖父の家から毎日歩いて学校に通いました。学校から帰ると家の裏にあるマンゴーの木に登って、先生に教えてもらったことを暗記しました。あるお寺で英語やコンピュータの勉強が無料でできることを聞き、勉強しに行きました。お寺では4年間勉強し、その間はレストランでアルバイトをしました。いくら大変でも勉強をやめようと思ったことは一度も



ありません。

高校卒業後、あるガイドの女性に会いました。若いのに家を建てた彼女に感動しました。そして彼女が勉強した日本語学校に入ることにしました。日本語は難しくあきらめたくなくなる時もありましたが、将来のために頑

張りました。学校を卒業してから日本の旅行会社に就職できました。旅行会社での仕事はカンボジアの女性にはとても良い仕事です。日本語を勉強していなかったら今の会社に就職することはできませんでした。時々レストランにも行くことができるようになりました。勉強は本当に役に立ちました！

たくさんの方が勉強がうまくいかないことを人のせいにして、お金のせいにしてしまいます。何のために勉強するのでしょうか？ 両親のお金を使わなくても、アルバイトをしながら学校に通えます。カンボジアには無料で英語や日本語の勉強ができるお寺もたくさんあります。家の仕事を手伝いながら学校にも通えます。自分の将来は自分でつくるものです。誰かのせいでうまくいかないとしたりするのは違うと思います。母は3年前に亡くなりましたが、今の私を見て喜んでくれていると思います。これからも自分の将来のために頑張ります。

5. サンティスック・デーネットさん (ラオス ラオス国立大学 学生 23歳) 「皆さんができること」

皆さん、事故は怖いものですね。事故は我々が意図しないで起こるので、事前には分かりません。ラオスには人口が700万人しかいないのに、事故が多いです。バイクと車が増えているので、事故もだんだん増えています。

私は、「事故は道路や車両の状況より、人によって引き起こされることが多い」と思います。例えば、飲酒運転、速度超過、マナーを守らないことなどによってです。気を付けていても、時には他の車両に衝突されることがあります。だから、私は事故は怖いものだと思います。車が壊れた場合は修理することができます。しかし人の場合は、けがや障害を引き起こす可能性があります。勉強する機会を失うかもしれません。そして、仕事をする能力が落ちます。最悪の場合は死ぬかもしれません。国も良い人材を失います。

しかし私たちは自分でそれを防ぐことができます。例えば車に乗る時はシートベルトやヘルメットを着用してください。それらは事故が発生し

た時、私たちを助けることができるかもしれません。実際私は事故にあってありますが、幸いにもヘルメットを着用していました。もしかぶっていなかったら、私はここに立つチャンスがなかったらと思うま



す。だから私は、事故を防止することはあまり難しくないと思います。皆さんにもできます。ヘルメットを着用する時、髪の毛が乱れたり、かっこのなることを心配しないでください。ヘルメットやシートベルトを着用することは、自分や周りの人を守るができるかっこいい人です。事故を防止し、人生を守るのはあなた自身です。

ここにいる皆さんは、これから必ずシートベルトやヘルメットを着用しましょう。なぜなら、事故を減らすことによって、2015年に統合するASEAN諸国に対してラオスの良い面を示すことができるからです。皆さん、家に帰る時気を付けてくださいね。

6. オンピモン・シットコンデン (タイ チェンマイラチャパット大学 学生 20歳) 「私が選んだ道」

私はチェンマイの山に住むモン族出身です。モン族はほとんどが農業で、勉強はそれほど重要ではありません。特に女性は結婚すると夫の家に尽くさなければならず、娘の教育に投資する親は多くはありません。さらに、モン族独自の「ジーポーニア」という習慣もその要因の1つです。

女性の皆さん、突然数人の男性に囲まれ知らない人の家に連れて行かれたらどう思いますか。とても怖いでしょう。ジーポーニアは、男性が気に入った女性を無理やり自分の家に連れて行き結婚する習慣です。女性の同意は全く必要がなく、まるで誘拐です。学校から帰る途中でジーポーニアされることもあります。狙われるのはたいいてい14歳以上の女の子で、一度男性の家に入ると、逃げたとしても自分の両親でも受け入れてくれません。その後は学校を退学し、男性の家族と一緒に



に住んで家事や農業を手伝わなければなりません。ほんの数分間で起きるジーポーニアが、女性の人生を全て変えてしまいます。この習慣は今でもモン族の女性を苦しめています。私は女性に自分の人生

を選ぶ権利がないのは不公平だと思います。

モン族の女性の人生は、結婚、出産、農業と決まっています。生まれた子どもたちも、たいてい同じようなスタイルで生活します。私の家も農家です。両親は、自分たちと同じような苦しい生活を送らないよう勉強しなさいといつも言っていました。私も、両親を助ける方法は勉強することだと考えていました。

ちょうど15歳の頃、チェンマイ市内の高校に通っていた親戚が町の学校の話聞かせてくれました。町での生活は便利だし、町での教育は私の人生を変えられると思いました。ジーポーニアから逃れ家族の生活を良くするため、私は15歳で家族と離れ、町で勉強することを決意しました。

今、私は日本語を専攻し、日本文化や日本事情も勉強しています。日本語も日本に関する知識もまだまだですが、一生懸命勉強し卒業すれば、日本語を使った職業に就くことができます。町で勉強する道を選んだ時点で、ジーポーニアから逃れられただけでなく、たくさんの選択肢ができました。もしあのままモン族の村にいたらジーポーニアに遭っていたかもしれないし、町で経験してきたことや日本に関する知識とも出会えてなかったでしょう。最初は怖くて不安でしたが、勇気を出して良かったです。私は自分の選んだ道は正しかったと思っています。これからも自分の人生は自分で決めていきます。

7. ワッシャラーコン・セーヘンさん

(タイ モンクット王ラカバン工科大学 学生 21歳)
「なりたい自分」

なりたい自分に今の自分を変えたいと思ったことがありますか。自分を変えることはとても難し

いと思います。

子どもの頃から私は音楽を聴くのも歌うのも大好きでした。でも私は人見知りで、人前で話すことが苦手でした。ですから、ひとりで自分の部屋で音楽を聴いて歌っていました。しかし大好きな歌を歌っていると、「歌が上手になりたい」、「人前で歌えたらいいな」と思うようになりました。でも、「声も良くないし、たくさん人の前で歌うのも苦手だし……」という気持ちもありました。

ある日私は同じ趣味を持つ親友に歌を聴かせました。「悪くないわね。私けっこう好きだよ」と親友が言ってくれました。臆病であまり自信がない私は、その言葉に勇気付けられました。そして私は初めて歌のコンテストに参加しました。ちゃんと歌えましたが、私はたくさん人の前でとても緊張して目をつぶったままでした。「初めてのステージだからしょうがないか、下手だったけどステージで歌えてよかった」と自分を励ましました。

後日、私はもっと大きいイベントに参加しました。前よりも人が多いので私はとても緊張し、「今すぐステージから降りたい」、「だめ、最後まで歌わないと……」という考えで一杯になりました。とても辛くて時間の流れが長く感じられました。ステージを降りた瞬間、その場から遠く離れようとしたのですが、自分のミスに気がきました。私は目の前の人たちをじっと見すぎて緊張してしまい、歌に集中できなかったのです。恥ずかしくて忘れたくても忘れられない思い出になりました。けれども、とても良い勉強になりました。

皆の前でうまく歌いたいから、いつまでも落ち込んでいられないと思い、たくさん練習しました。クラスメイトの前で歌い、人前で歌うことをイメージしながら毎日歌いました。次のコンテストでは3時間前から会場に入り、友達の前でずっと練習をしました。歌に集中し、悔いがないように精いっぱい歌いました。歌い切って皆が拍手した瞬間、私は心の中で叫んでいました。「やっと、できた」と。結果は準優勝でしたが、名前が呼ば



れただけで十分でした。「私は変わった!」と思わず声を出しました。

自分を変えられるようにここまで頑張ってきたことは決して無駄ではありませんでした。恥ずかしさは今、嬉しさに変わりました。どんな大変なことでも頑張りが続いたら、きっとなりたい自分に会える日が来るはずです。

8. ユオン・ジン・インさん

(マレーシア サインスマレーシア大学 学生 22歳)
「先生になったら」

将来私は良い先生になりたいです。

もし先生になったら、子どもたちにエジソンを紹介します。彼は100回失敗しても諦めず、最後に成功しました。だから子どもたちに彼の不屈の精神を学んでほしいのです。

もし先生になったら、子どもたちにベートーベンを紹介します。彼は耳が聞こえなくても有名なピアニストになりました。だから子どもたちに、どんなに失敗しても言い訳をしないことを学んでほしいのです。

もし先生になったら、子どもたちにドラえもんを紹介します。ドラえもんは親切で便利な道具をポケットの中に持ち、いつも弱い子どもの味方です。彼のように弱い人の味方になることを子どもたちに学んでほしいのです。皆が困っているほか

の人を手伝ってあげれば、きっとこの世界は、もっと良くなります。

もし先生になったら、子どもたちに小鳥を紹介します。小鳥のように飛ぶことはできないけれど、自由に生活できます。人は良い生活のためにいつ

も一生懸命働いています。特にサラリーマンは全然自分の時間がありません。私は将来の子どもたちにはこんな働き虫にならないでほしいのです。

もし先生になったら、子どもたちに^{アリ}蟻を紹介します。蟻はとても小さいけれど力を合わせると強くなれます。こんな話があります。虎が蟻をおどしました。蟻の家が壊され、食べ物も奪われて蟻たちはかわいそうでした。しかし蟻たちは一緒になってみんなで虎を刺し、虎は全然来なくなりました。このことは、1人の力は限りがあるけれど、皆が一緒になればとても強くなることを教えてくれています。チームワークがいつも大切だと思います。

もし先生になったら、子どもたちに Mr. ビーンを紹介します。Mr. ビーンは博士号を取っているけれどコメディアンになりました。彼の作品はとても人気があり、彼も皆を笑わせることができ



アジアに見る自分の未来を切り開く志

特定非営利活動法人アイセック・ジャパン (AIESEC)
土屋沙也 (明治大学政治経済学部政治学科4年)

2013年度からの日本在外企業協会様とのご縁で、今年度も日本語スピーチ・コンテスト優秀者招聘事業に携わることができ大変うれしく思います。来日から発表会当日までの中で、同世代のASEANの若者たちと自国の文化について話す機会は非常に良い刺激となりました。皆さんが日本語を学ぶようになったきっかけを伺うと、「日本のアニメが好きだったから」「日本の歌を聴いて美しい言葉だと思ったから」など、文化的な側面からの興味関心であったことを知り、日本で生まれ育った私には気が付くことができなかつたような日本文化の価値を再認識することができました。同時に、1人の日本人として自国の文化に誇りを抱けるようになりました。

スピーチの練習から当日の発表まで、優秀者の皆さんの日本語の流ちょうさに感動しただけではなく、それぞれのエピソードが詰まったスピーチ内容に深く感銘を受けました。皆さんのスピーチからは、「自分の未来は自分で切り開く」という強い意志や、将来に対する希望を感じ取れました。発表をする表情からは、これからの社会をけん引していく若者の力強いエネルギーを感じました。どのような環境でも常に自分の志を持って努力し続けることで、自分の実現したいことは達成し得るのだと彼らから学ぶことができました。

このような貴重な機会を提供してくださった関係者の皆様に感謝を申し上げるとともに、アイセックのメンバーの1人として、世界で活躍できるリーダーシップを持った学生を輩出するために尽力してまいります。 ■



てうれしいそうです。彼のように博士号を取ったり人気者になることはできないけれど、子どもたちは彼の心を学ぶことが大切だと思います。「自分の生活を自分で選び、好きな生活をするのは幸せです」と教えたいです。

もし先生になったら、子どもたちに不屈の精神とチームワーク、失敗しても言い訳せず、自由に好きな生活をして、いつも弱い人の味方になることの大切さを教えたいです。そうすれば、きっと幸せになれます。

9. タン・ゼーリンさん

(マレーシア マラヤ大学 学生 22歳)

「文の終わりに付けるもの」

「それはかわいいね」「どこに行くの?」「分かるよ」の中の「よ」「ね」「の」は終助詞です。終助詞は文に意味を添えるもので、文の終わりに付けて自分の気持ちを伝えます。初めてアニメを見た時、とても面白いと思いました。例えば、「嘘ついてないよー」「踊ろうぜー」などです。

この終助詞を上手に使えると自然な日本語になり、人の関係も良くできます。例えば、「これがきれいだと思います」の機械的な教科書の文と「これがきれいですね?」を比べると、言いたいことは同じでもニュアンスや感じ方は全然違います。これは終助詞の素晴らしさだと思います。

しかしいろいろなルールがあり、場面、相手、年齢などによってそれぞれの終助詞を使い分けれます。ルールが分からないと使い方を間違えてしまいます。その中で一番大きなルールは、女性が用いるものと男性が用いるものです。例えば、「行くぞ」と「行くわよ」。少し声の演技をしてみます。



(声のトーンを変えて)「行くぞ」、「行くわよ」。どちらが男性で、どちらが女性か分かりますか?

他の言語にも終助詞と似たものがあります。マレー語には、

外国人にとって不思議な「LAH」という言葉があります。マレーシア人はマレー語や英語にこの「LAH」をよく使います。でも、どういう機能でしょうか? 例えば日本語の「ね」の機能は確認したい時、「よ」は説明や主張したい時に使います。「LAH」は両方の場合に使える上、他の意味も持っています。例えば、(LAHのイントネーションを変えて)「MAKANLAH」と「BOLEHLAH」の意味は違います。最初のは「どうぞ、食べてね」という意味ですが、2番目は「できるはずよ」という意味になります。どうしてかということ、イントネーションによって様々な意味を持つからです。

今年、早稲田大学から6人の留学生が私の大学に来ました。交流を通じていろいろな言語の特性を学ぶことができました。時々皆さんが日本語の会話に「LAH」を使うようになり、私はとても感動しました。私が終助詞を上手に使うと、日本人の友達が喜んでくれます。自然に使えるようになると日本語を話す勇気も上がり、日本語の勉強も楽しくなります。そして、少しずつ日本人の心に近づくことができるのではないのでしょうか。

10. ジア・パオラ・エセルさん

(フィリピン ミンダナオ国際大学 学生 20歳)

「言葉の限界を超えるブロガー」

言語は使うことにこそ意味があると思いませんか。私はその言語を母語とする人たちと話し、聞き、思いを伝え合いたい。私の夢は日本を旅するスーパー・マルチリンガル・ブロガーです。

フィリピン人は地方で使う母語と国語のフィリピン語、学校の授業で使う英語の3つの言語ができます。その上私は高校で中国語も習い、韓国語もドラマで片言だけ覚えました。日本語はアニメを見て、音楽みたいできれいだと思いをもちました。字幕を消して、こんなことを言っているのかなと予想すると意外と正しくて、「私って日本人? すごい!」と思いました。皆さんも違う言語が分かったり話せたりすると、違う人になったような幸せな気分になりませんか。

言語ができるようになると、その国のことをもっと知りたくなりますよね。私は日本語と日本学が学べる大学に入りましたが、授業だけでは



もの足りません。「日本人の日本語が聞きたい、日本人と話したい」と私の気持ちは高まるばかり。やっぱり日本を旅するブロガーになるしかありません。世界を旅するブロガーにはまっていた私は、自分

も日本を旅して、見て、聞いて、触れてみたいと考えたのです。

日本で試してみたいことは山ほどあります。神社でおみくじを引いて、凶が出ても木に結べば大丈夫なのか確かめる。寒い夜こたつに入って、足を暖めるってどんな感じが知りたい。メイドカフェのメイドとうちのメイドさんはどう違うのかチェックする。ちっぽけなことって言わないでください。私にとっては大きな「なぜ?」「何?」なんです。外国人なら誰もが知りたいことですよ。それをフィリピン語、英語、中国語、韓国語、そして日本人にも日本語で伝えられたら、すごいでしょ?

こんなふうに考えれば考えるほど私の夢はどこまでも広がります。大好きなブロガーがこんな言葉を書いています。「その人が理解できる言語で伝えると頭に入る。その人の母語で伝えると心の中に入る。言葉の限界は、自分自身の世界の限界なのだ」。

私は言葉の限界を超え、世界の限界も超えていくスーパー・マルチリンガル・ブロガーになりたいと願っています。

11. グラム・ビンタン・シャーリアルさん (インドネシア アイルランガ大学 学生 21歳) 「笑顔の力」

皆さんが幸せを感じる時はどんな時ですか。私が幸せを感じる時は、欲しいものが手に入った時や愛する人と一緒にいる時です。しかし、最も幸せを感じる時は人の笑顔を見た時です。

今、私には笑顔を見たい人がいます。それは「アナックジャラナン」の子どもたちです。アナックジャラナンとは、道で物を売り、歌を歌ってお金を稼いでいる子どもたちのことです。インドネシ

アには約540万人いると言われていています。彼らは貧しい家に生まれ、自分や家族のために生活費を稼いでいます。学校に行く時間はなく、勉強したくても勉強できません。皆さんが子どもの頃は、学校で勉強したり友達と遊んだり、毎日笑っていたと思います。私も毎日友達とゲームをしたり、たこを飛ばしたりして笑っていました。毎日が楽しくて幸せでした。しかし、アナックジャラナンの子どもたちには遊ぶ時間も勉強をする時間ありません。

私はアナックジャラナンが集まる場所に行ることがあります。朝から働いた後にここに来て一生懸命勉強をしていて、すごいなあと思感動しました。子どもたちは笑顔で勉強したり遊んだりしていて、普通の子どもと変わりません。それを見て、できるだけ多くのアナックジャラナンを笑顔にするためにどうすればいいのかと考え始め、考えついたのは他の人々と協力して学校をつくることです。

私の父は昔アナックジャラナンでした。1人でモスクに住み、学校へ行くためのお金を集めていました。幸せなことに父は教育を受けることができました。父は、教育がなかったら違う人生になっていただろうと言っていました。私は今の父の笑顔をつくったのは学校と先生だと思いました。私は学校をつくり、生きる上での大切な力やモラルを教えたいと思っています。

私はアナックジャラナンの子どもたちに、私の子どもの頃と同じような幸せを感じさせたいと思います。学校は、彼らの生活を彼らの力で変えることができるような力を身につける第一歩になると考えています。アナックジャラナンの子どもたち一人ひとりが笑顔になり生きる力を持てば、家族や周りの人々を元気にできると思います。

1つの笑顔はもう1つの笑顔をつくります。私がアナックジャラナンの子どもたちの笑顔をつくれれば、彼らは次の子どもたちの笑顔をつくってくれると思います。笑顔がたくさんある国はとても



幸せな国だと思います。なので私はアナックジャラナンやその家族のため、またインドネシアのためにアナックジャラナンの笑顔をつくりたい。そして幸せを感じる人がどんどん増えて、笑顔が広がっていけばいいなと思います。この先に待つ笑顔のために、私自身も笑いながら頑張っていきたいです。

12. ダニエル・ウランダイさん (フィリピン ミンダナオ国際大学 学生 19歳) 「少年ダニエルの小さな悩み」

小学校5年の体育の授業中、「もう、フィリピンに帰りたい」、突然少年ダニエルの大きな瞳から涙があふれました。彼の母は日系人、父はフィリピン人。子どもたちをフィリピンに残し長い間日本で働いてきた2人は、家族みんなで暮らすためにダニエルを日本に呼び寄せたのでした。

日本に暮らす日系人や外国人の子どもたちは現在2万人ほど。しかし、言葉の問題やいじめ、勉強についていけないなどで、小学校や中学校の途中でやめてしまう子どもたちが少なくありません。だけどダニエル、つまり俺が泣いていたのは、そういうのじゃなかったんです。

初めて登校した日からクラスメイトは片言の英語で話しかけてくれ、バスケが好きな友達もすぐにできました。勉強はもともと好きじゃないから分からなくても平気。じゃ、どうしてかって？



それは、友達と同じことで笑えないということでした。

例えばある日。「ダニエル、昨日のイモト、サイコーだったよな?」「いもと? 誰だっけ?」。当時の俺はテレビを見ていても、タレントの名前までは覚えられなかった。また、ある日のクラブの会議中。「でも、そんなの関係ねえ、はい、おっぱっぴー」。「何言ってるんだよ。まじめにしろ」。「ダニエル、このギャグ知らねえ? KYだな!」。半年か1年で変わるギャグにはついていけず、みんなと笑いがずれるたびに「悲しい、寂しい」ってつらくなったんです。

小さな悩みって思えますか。でも小5男子にとっては大きな悩みです。だって話すことって、テレビ、バスケ、女の子のうわさ、そんなものです。そこがずれるとつらくてフィリピンに帰りたいけど、途中で逃げ出すのは嫌でした。そこで、暇があればお笑い番組を見て笑いの勉強をしました。良いことも悪いことも友達と一緒にやり

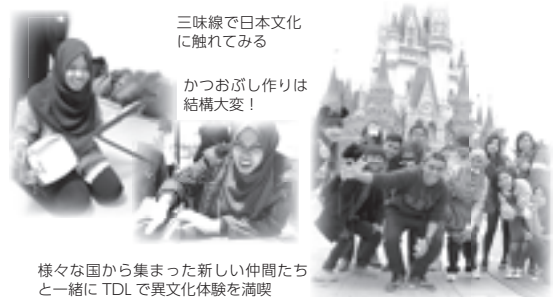
お互いの文化の理解が大切

リンダ・アリア・ウィダヤンティさん (インドネシア)

日本での生活はとても楽しく、自国で感じられない雰囲気、習慣の違いなど良い思い出をつくることができました。毎日いろいろなところへ行き、皆と一緒に楽しく過ごせたことが忘れられない思い出になりました。

スピーチ発表会はとても緊張しました。そこで気付いたことは、「母国語では伝わるが、外国語で気持ちを伝えるのは簡単なことではない。文化を学ぶことが必要」だということでした。

私のスピーチは「日本のおもてなしから平和が生まれる」でした。日本では現在、イスラム教について悪いニュースが流れているようですが、日本の皆さんが私の



スピーチを聞いていただいた後に、イスラム教に対しての見方が少しでも変わるといいなと思いました。日本とイスラム教の文化は違うかもしれませんが、お互いに文化を理解しようという気持ちが大切だと思います。そうすれば勘違いもないし、平和を築くことができるでしょう。これからも日本のおもてなしを広げていきたいと思っています! (中央の写真撮影: チュン・ミン・フィヤン)

続けました。そのうちに、「それ、メッチャ受ける」「ダニエル、チョーヤバ」と笑いが合ってきて、本物の仲間になっていく気がしました。

中学生になり、バスケの試合で小学校の仲間会った時、「ダニエル、頑張ったな。日本語全然分かんなかったのに今はペラペラじゃん」。「うん、あの時逃げなくてよかった」。

今も日本のどこかで小さな悩みを抱えている少年がいたら言ってあげたい。大人にどう思われようと、テレビでも漫画でも何でもいいから笑いを勉強しろ、いつも友達と一緒にいって。そうすれば、いつか日本語もペラペラになりいじめもなくなる。勉強ができなくても日本から逃げなくてもいいよって。

今もたまに泣きたいことがあります。頑張っています。いつか日本へ行った時、市役所やスーパーで働いているあの仲間「ダニエル、頑張ったな」って言ってもらえるように……。

元気な女性たちのチャレンジ精神が光る



コーディネーター 須藤 真
(日本在外企業協会 業務部主幹)

日本に関心を持ったきっかけは、全員が日本のアニメや歌、ドラマだという。本事業がスタートした当時の若者たちが経済大国日本に憧れて日本語を始めたのとは様変わりである。そんなアジアの若者たちが、はつらつとみごとな日本語スピーチを披露した。

ブルネイの**ミンさん**はスマホを取り上げた。スマホへの過度な依存は誰にも身に覚えのある問題だけに、思わずはっとさせられた。ラオスの**サンティスックさん**は交通事故防止のためヘルメットとシートベルトの着用を訴えた。日本と違い、ラオスではモータリゼーションが始まったばかりなのだろう。彼は自身が事故にあったことを機にレスキューのボランティアにも参加しているという。

インドネシアの**リンダさん**は、日本人に「おもてなし」の心でムスリムを理解してほしいと願っ

ている。マレーシアの**タンさん**は、日本語の会話で、「よ」、「ね」、「の」などの語尾を効果的に使えるようになって日本人の心に近づきたいという。どちらも異文化を理解するための大事なヒントがあるように思えてならない。

フィリピンの**ジアさん**の夢は、世界の人たちにその国の言語で語りかけるブロガーになることだ。スピーチに巧みに中国語や韓国語まで織り交ぜていたのには驚いた。マレーシアの**ユオンさん**は、先生になって子どもたちに正義の心を教えたいと語った。インドネシアの**グラムさん**は、貧しい子どもたちのための学校をつくることが目標。小学生時代にフィリピンから日本に移り住んだことのある**ダニエルさん**は、お笑い番組を通して言葉の壁を克服、同じように外国から日本に来て苦勞している子どもたちに自身の体験を伝えて励ましたいという。どれも思いやりにあふれた心温まる内容だった。

社会問題への提案、将来への夢、特に印象的だったのは、逆境をものともしない元気な女性たちだ。今回初参加となったミャンマーの代表**サンディー・ウェイさん**は、両親の反対を押し切り、僧院の無料クラスに入って日本語を習得。カンボジアの**ウサーさん**は、農村から町に出て働きながら日本語を学び旅行会社への就職を勝ち取った。タイの**オンピモンさん**は、部族の旧習が残る村を離れ都会で進学。**ワッシュャラーコンさん**は、歌唱コンクールに思い切って出場、内気な自身を克服した。挑戦する彼女たちの姿は、その国の未来にひときわ明るい希望と勇気の光を放っているように見えた。

アジアの若者たちは、国籍は違っても互いにすぐに打ち解けた。生まれて初めて電車に乗った驚き、時間を正確に守らなければならないことへの戸惑い、100円ショップで何を買ったかなど、日本語を共通言語に楽しそうに語り合っていた。今回の参加者たちも過去の参加者同様、誰もが将来日本と関係のある仕事をしたいと願っている。30年間にわたりこの草の根交流を支え続けてきたもの、それは自国と日本との架け橋になりたいという、いつの時代も変わらない若者たちの熱い想いなのではないだろうか。